

囚われのエンゲージ

「ねえ、お姉ちゃん！ 起きて！」

妹の梨花の声で、吉住沙耶は眠い目をなんとか開けた。

今日は休日だ。できれば遅くまで寝ていたいのが、そうはいかない。大手スーパー『ムラサキ堂』に勤める沙耶にとっては休日だが、小学校に通う梨花にとっては単なる平日だからだ。

「お姉ちゃん、朝だよ！」

梨花は朝から元氣いっぱい、にこにこしている。時計を見ると、まだ目覚ましの鳴る時間ではない。梨花にしてみれば、目覚ましより早く起きたのだから、姉も起こしてあげようと思ったのだろう。

「ありがとう……。おはよう、梨花」

「うん。おはよう、お姉ちゃん！」

正直なところ、沙耶はぎりぎりまで眠っていたのだが、梨花にはそんなことは言えない。我が子同然に可愛がっている妹を嫌な気持ちにさせたくはなかった。

沙耶は布団から起き上がり、身支度を整えようとした。梨花はもうとつくに着替えて、顔も洗っ

ている。まったく、元気すぎるくらいに元気だ。

二十二歳の沙耶は二年前に母を亡くしてから、梨花と二人でこのアパートで暮らしている。父はもうずっと前に家を出ていき、行方がわからない。たまにふらりと帰ってくることもあったが、すぐにまたどこかに行ってしまうから、いないのと同じだ。

本当に二人きりの家族で、だからこそ、沙耶は梨花をととても大事にしていた。

「ねえ、お姉ちゃん、あたしの体操服はどこ？」

梨花はタンスの引き出しを探っている。

「袋に入れて、ランドセルの横に置いてあるわよ」

「あー、ホント。ありがとう！でも、お姉ちゃんは忙しいんだし、こんなことしなくていいんだよ。四年生なんだから、自分でちゃんとやれるもん」

実はけっこう忘れん坊で、危なっかしいところもあるのだが、本人はやる気満々だ。確かに、沙耶は手を出しすぎるところがあるかもしれない。自分が母代わりだと思うと、すぐになんでもしてあげたくなってしまうのだ。

「そうだね。梨花はもうなんだってできるもんね」

「うん！あたし、洗濯機、回しといてあげる」

ショートカットの髪を揺らして、梨花は洗面所のほうへと駆けていった。その足音に、沙耶は顔をしかめる。古いアパートだが、たとえばそうでなかったとしても、ここは二階だ。下に響くに決まっている。

「走らないで！」

「あ、ごめんささい」

元気なのはいいが、やはり少し注意散漫なところがある。とはいえ、沙耶にとっては、梨花は可愛い妹だった。

今までつらいこともたくさんあったが、沙耶は梨花がいてくれて、本当によかったと思う。彼女がいてくれたから、母亡き後も、自分は独りぼっちにならずに済んだのだ。

わたしには恋人もいないし……

沙耶はそう考えて、一人で苦笑した。今まで恋人なんていたことは一度もない。おとなしい性格のため、学校ではまったく目立たなかった。一応、好きな男の子はいたが、告白どころか話しかけることすらできずに、片想いのまま卒業したのだ。

高校を卒業した後、ムラサキ堂に就職し、そのすぐ後で母が病に倒れた。それから今に至るまで、多忙の日々で、たとえ誰かに誘われたとしてもデートなんてできなかった。もつとも、誰にも誘われたことはないのだが。

沙耶は身支度みじたを済ませると長い髪をうしろでひとつにくくった。それから、軽い朝食を作る。といつても、トーストを食べるつもりだったから、自分と梨花の分の目玉焼きを焼くだけだ。それに昨夜の夕食用に作ったポテトサラダの残りとかップスープを用意すればいい。

フライパンに卵を二個落とすときに、梨花がキッチンへやってくる。

「あたし、カップスープ作るね。お姉ちゃんは？」

梨花は本当に姉想いのいい子だ。沙耶はにつこり笑った。

「わたしはコーヒーがいいな」

「任せといて」

梨花は戸棚からカップスープの素やインスタントコーヒーの瓶を取り出している。そのうしろ姿をちらりと見て、沙耶はふと顔を曇らせた。妹が大事であればあるほど、ときどき、不安が過ぎる。自分になにかあったら、彼女はどうなるだろう。

実際、沙耶は一カ月ほど前に、事故に遭った。いや、正確には遭いかけた。仕事から帰る途中、自転車に乗っていたのだが、スピードを出した車に追い抜かれ、接触しそうになったのだ。風圧で歩道側に倒れ、投げ出された。ちょっとした打撲と擦り傷だけだったものの、頭を打ったために一時、意識を失い、通行人が呼んでくれた救急車で病院に運ばれる羽目になった。

病院で意識を取り戻した沙耶は、すぐに家に帰ろうとした。だが、脳震盪のうしんどうを起こしていたため、病院に足止めされたのだ。安静にしていなければならぬと言われて、パニックに陥りかけた。梨花が一人きりで家にいるのに……と。

看護師になだめられた沙耶は、結局、許可を取って、アパートの隣人に電話をかけた。梨花の友達の母親でもある彼女に。事情を話したら、梨花を一晚預かってくれることになり、ほっとした。自分が一晚で家に帰れることはわかっていなかったから。

もし、重傷を負っていたら……。いや、それより、自分が死んでしまったら……

梨花は一人で残されることになる。行き先は施設しかない。

近い親族はいないに等しい。少なくとも、身寄りのない梨花の面倒を十年も見てくれる人は誰もいないのだ。もちろん、父はどこにいてもわからないし、わかったところで、まるつきり当てにならない。

だから、沙耶はある計画を立てていた。それが成功すれば、少しは頼れる人ができるかもしれない。人の命なんてはかないものだ。母が亡くなったときに、沙耶はそう感じた。母はまだ四十二歳だった。健康なら、あと四十年は生きていられるはずだったのに。

そう考えたら、自分だって、いつまで生きていられるかわからない。病気になるかもしれないし、事故に遭うかもしれない。自転車にはもう乗っていないが、それでも危険はあちこちにある。運が悪ければ、歩いていても事故に遭うのだ。

だから、沙耶は梨花のために万全の準備をしておきたかった。彼女が成人するまでに不自由なく、安全に暮らせるように。

「あたし、パンを焼いてあげるね」

カップスープとインスタントコーヒーをつくった梨花は、トースターを茶の間に持っていく、食パンを二枚入れた。沙耶は目玉焼きを皿に移しながら、梨花を見て微笑んだ。

梨花はとても素直に育っている。物心ついたときから父親が家にいないことにも、ほとんど不満を洩らさない。自分は大した姉ではないし、充分なこともしてあげられないのに。

沙耶はポテトサラダとハムを皿に盛りつけ、それを茶の間のテーブルに運んだ。

やがて、トーストが焼け、梨花は手を合わせた。

「いただきます！」

にこにこ朝食を頬張る梨花の姿を見て、沙耶は決心した。彼女のために、どんな嫌な思いをしようとも、必ず計画を成功させよう。

沙耶は梨花が学校に出かけた後、洗濯や掃除を済ませてから、アパートを出た。

今日は仕事ではないが、大事な人と会うので、きちんとスーツを着てみた。紺色のスーツで、沙耶は自分がこれから就職活動でもするような気分になった。

仕事のための面接なら、まだ気が楽だ。これから沙耶は会ったこともない母方の祖父に、孫だとな乗りに行くのだ。

祖母は早くに亡くなっていて、一人娘の母は祖父に育てられたという。ところが、祖父は両親の結婚に反対だった。いや、反対などという生易しいものではない。夢見る芸術家だった父が挨拶に来たとき、文字どおり罵倒したのだ。結局、そのことがきっかけになり、母は父と駆け落ちして勝手に入籍した。だが、祖父は許してくれず、母に二度と帰ってくるなど言い渡したらしい。

沙耶は子供の頃、自分に母方の祖父母がいけないことに疑問を持ち、それについて何度か母に尋ねていた。父方の祖父母が亡くなっていることはもう知っていたからだ。小さいときには、はぐらかされたが、中学に入った頃にやっと本当のことを話してもらえた。

母は二度と帰ってくるなど言われたとおり、それきり自分の父親には会わなかった。沙耶は母が病に倒れたとき、何度も実家に連絡しようかと尋ねたのだが、そのたびに、母は拒絶した。彼女は

自分の父をとても恐れていたのだ。母がそれほど嫌がっているのに、無理に会わせることはないと思いい、沙耶は行動に移さなかった。

しかし、今となつては、あのとき知らせるべきだったと思う。母の命があまり長くないことを知りながら、沙耶は母が死ぬとは、どうしても考えられなかったのだ。あのとき、母が死ぬことをちゃんと受け止めていたら、沙耶は連絡を入れていたはずだ。

けれども、沙耶がそうする前に、母は死んでしまった。父親と和解することもなく、死んでしまったのだ。

すべてはわたしのせい……

わかっている。現実をちゃんと見るべきだったのに、それができなかった。今さら、自分がこの祖父に会いにいつて、歓迎されるとはとも思えない。長い年月を経て、祖父の心はもう母を許しているかもしれない。だとして、なおさら沙耶が母の死の際に、実家に一言も連絡を入れなかったことを、祖父が許してくれるとは思えなかった。

それでも、沙耶が頼るべきは祖父しかいない。自分の身になにかあったとき、ほかに、梨花のことを頼める相手はいないのだ。

沙耶は母が残した古いアドレス帳を握り締めた。そこには、実家の住所と電話番号が書かれている。電話してみたものの、そのときは誰も出なかった。母の実家が今はどうなっているのか、知るのが怖かったが、今日は意を決して、訪ねてみることにした。

電車を乗り継ぎ、沙耶は住所の最寄り駅で降りた。そして、携帯電話に地図を表示する。どこを

向いても、お屋敷のような大きな家が目に入ることに、少なからずショックを受けた。

母から祖父のことはあまり聞かされていないが、どうやら母はお金持ちのお嬢様だったらしい。住所を見て、ここが高級住宅街であることはわかっていたのだが、改めて、ここは自分達の住む世界とは違う場所なのだということがひしひしと感じられた。

ひよっとしたら、祖父に追いつ返されてしまうかもしれない。

そんな考えが頭に浮かんだが、ここで帰るわけにはいかない。妹のために、そして、母のためにも祖父に会いたかった。

実を言えば、梨花は異母妹なので、母の父親とはまったく血の繋がりはない。けれども、沙耶が頼るべき相手は今や祖父しかいなかった。

「ここだわ……」

沙耶は地図を見、それから表札を確かめた。

表札の名は宮瀬。母の旧姓だった。

大きな門と門扉の向こうに道があり、その向こうに美しい洋風の屋敷が見えた。もちろんかなり大きい。ドキドキしながら、沙耶は門扉につけてあるインターフォンを押そうとした。だが、後ろから車の音が聞こえて、振り返った。

黒塗りの高級車だ。沙耶は思わず車に乗っているのは誰なのか、視線を走らせた。祖父がその中にいるかもしれないと思ったのだ。

車の後部座席のパワーウィンドウが下がる。残念ながら、老人ではなく、三十代くらいの男が顔

を見せる。

男の人なのに綺麗な人……

驚くほど整った容貌の男に、沙耶は目を瞠った。男らしいしつかりとした眉に、印象的な切れ長の目、それからすつと通った鼻筋、引き締まった唇の形がとてもいい。

なんだかドキドキしてしまう。そんな場合ではないのに。

「うちに用事のある方ですか？」

優しい声で話しかけられて、沙耶はまごついた。この人は誰なのだろう。自分と血縁関係にあるのだろうか。わからないながらも、自己紹介をしなくてはならないと思った。

「あの……わたし、吉住沙耶と申します」

そう名乗った途端、彼の表情が一変した。

眉がぎゅっと寄せられ、眼差しは鋭くなった。睨みつけられているような気がして、沙耶は驚いた。初対面なのだから、こんなふうに睨まれるような覚えはない。

「君は金目当てで、やってきたのか？」

彼の声は急に刺々しいものとなっていた。

「えっ……あの……」

「とにかく、話だけは聞いてやろう。一緒に入ってくるがいい」

パワーウィンドウが上がったかと思うと、門扉が自動的に開いていく。そして、車は敷地内へと入っていった。沙耶はわけがわからず、呆然と車を見送っていたが、とにかく入ってこいと言われ

たのだ。あんな乱暴な言い方をされて、彼とはもうこれ以上、話したくなかったが、とにかく祖父と会わなくてはならない。沙耶は決心して、門の中へと足を踏み入れた。

それにしても、彼は一体、誰なのかしら……

名乗っただけで、彼はわたしが誰なのかわかったみたいだった。でも、金目当てって、どういうことなの？

母の実家はお金持ちかもしれないが、沙耶には関係のないことだ。働いているのだし、大金など必要としないからだ。

彼はきつと勘違いしているのよ。それとも、他の人と間違えたのかもしれない。

あんなに格好いい男性とせつかく会ったのに、睨にらまれたくはない。できれば笑ったところが見みたい。

沙耶はそんな呑気のんきなことを考えながら、屋敷の玄関へと向かった。

2

沙耶が通されたのは、立派な応接間だった。

革張りの大きなソファに腰を下ろして、思わず辺りを見回す。足元はふかふかの絨毯で、目の前のどっしりとしたテーブルはきつと大理石かなにかなのだろう。白くてつるつるして、石の模

様がある。沙耶は触ってみて、その冷たさを感じた。

折上げ天井にはシャンデリアがぶら下がっていて、サイドボードには値段が高そうな洋酒やピカピカに磨かれたグラスが並んでいる。一人でここに待たされて、落ち着かない気分で座っていると、この家のお手伝いらしき女性がお茶を持ってきてくれた。

「あの……わたし、宮瀬昭一みやせあきらさんに会いにきたんですけど」

今頃、用件を言うのは間抜けかもしれない。しかし、玄関に着くと、すぐここに通されたのだった。女性は動揺したような表情になったが、なんとか笑みを浮かべた。

「申し訳ありませんが、しばらくお待ちください」

どういうことだろう。祖父は病氣かなにかなのだろうか。あの男性はそもそも祖父のなんなのだろう。

女性が出ていくと、しばらくしてあの車の中にいた男性が応接間へと入ってきた。

車の中ではわからなかったが、彼は身長が高かった。均整のとれたスマートな身体がダークスーツに包まれている。

沙耶は立ち上がり、彼に頭を下げたが、彼のほうは無言のまま沙耶の前にどっかりと腰を下ろした。限りなく無作法ぶさほうだ。仕方なく沙耶も腰を下ろしたが、居心地が悪い。だいたい沙耶は名乗ったが、彼は名乗りもしない。じつと沙耶の顔を睨にらみつけ、やつと口を開いた。

「君が吉住沙耶か……」

改めてそう言った口調は苦々しげだった。

「わたしのことをご存知なのですか？」

「もちろんだ。私は宮瀬佳貴。君のお祖父さんの養子となった男だ。宮瀬ホールディングスのCEOでもある」

沙耶は目をしばたいたいて、彼を見つめた。養子ということは、一応、叔父と姪という関係になるのだ。「わたしの叔父さん……？」

「戸籍上はね。しかし、血の繋がりはない。そもそも、私は君に叔父さんなどと呼ばれたくない。君のような卑劣な女には！」

沙耶はいきなり罵声を浴びせられ、固まってしまった。

初対面なのに、どうしてこんなことを言われなきゃならないの？

よりもよって、卑劣だなんて罵倒されるとは思わなかった。生まれてこのかた一度だって、沙耶は道を踏み外したことがない。子供の頃にイタズラをしたことや嘘をついたことがないとは言わないが、自分の記憶の中で悪いことといったら、その辺りのことだ。自分でも馬鹿みたいに真面目だと思ふことがある。それくらい、沙耶は真つ当な人生を歩んできたのに、よく知りもしない相手から、非難される理由はないと思った。

「わたしは……」

反論しかけたのに、佳貴からはさらなる罵声を浴びせかけられた。

「どうして、君はお祖父さんが亡くなって一週間もしてから、のこのこやってきたんだ？ どうせ遺産目当てなんだらう？」

沙耶はその一言に驚いた。

「それでは……祖父は亡くなったんですか？」

佳貴の目つきはますます険悪なものとなった。

「今さら驚くことではないだろう？ 危険な状態だと何度も連絡したはずだ」

「そんな……！ わたし、そんな連絡なんて一度も受けたことはありません！」

たった一人の祖父だ。長くはないと知っていたら、絶対に駆けつけていたに決まっている。

しかし、どういうことだろう。彼は連絡したという。けれども、わたしは連絡なんて受けてない。

「しらばっくれるな。君が金にしか興味がないことは、よくわかっている。今日だって、遺産目当てでなければ、わざわざここには訪ねてきてないだろう」

「でも、本当に……」

「そういえば、君はお母さんが亡くなったときも、お祖父さんに知らせなかったな。後から聞いて、養父は嘆き悲しんでいたよ。どうして、君はそんなに情がないんだ？」

沙耶はずっと気にしていたことを指摘されて、愕然とした。すでに祖父は母が亡くなっていたことを知っていたのだ。

でも、なぜ……？

一体、誰が祖父に教えたのだろう。自分以外にその事実を伝える人間はいなかったはずだ。ひよつとしたら、祖父は母のことを調べたのかもしれない。お金持ちなら、探偵に探らせるのは簡単だろう。佳貴は祖父が危険な状態だと知らせたという。だが、沙耶はそんな知らせなど受け取っていない。

つまり、その行き違いは、きつと探偵が原因なのだ。探偵が間違った住所や電話番号を沙耶のものだと、祖父に報告したのかもしれない。

「わたし……知らせるべきでした。わたしが悪いんです」

「そうだ。なにかも君が悪い。お祖父さんは君のお母さんや君に許してもらいたかったのに……。君はそのチャンスを与えず、金だけを要求しにやってきたんだな？」

「いいえ！ わたし、お金なんて……」

「金なんていらないと？ 君が一切、なにもいらないと言うのなら、信じてやってもいいが」
皮肉めいた口調で尋ねられて、沙耶は黙り込んだ。

自分は働いているから、必要な分は稼いでいる。決して金持ちではないが、少しは貯金もある。しかし、梨花のためには、もっと蓄えが必要だった。梨花は成績がいいが、私立の学校には行けない。塾にも行けない。習い事もさせたかったが、我慢をさせてきた。服だって、食べ物だって、贅^{ぜい}沢^{たく}はできないし、遊びに連れていくことも頻繁にはできない。

ああ、でも、わたしはお金目当てなんかじゃないわ！

それとも、梨花のためにお金が必要だと思うことは、すでにお金目当てということになるのだろうか。自分のためではないけれども、結局は自分のためなのかもしれないと思う。梨花の幸せは、沙耶の幸せだからだ。

「どうやら金はいるようだな」

佳貴は沙耶の表情を読んだように言い、口元に歪^{ゆが}んだ笑みを浮かべた。

「わたしには小学生の妹がいるから……」

その途端、佳貴は驚いたように目を見開いた。

「妹がいるなんて話は聞いたことがないぞ！」

「妹はいます。ただ、母の子ではないんですけど」

探偵が調べたのなら、どうして梨花がいることを知らせていないのだろう。それは不思議だった。誰がどう調べても、梨花は赤ん坊の頃からずっと我が家にいる。

「お母さんの子ではないのか？ つまり……」

「その……異母妹です」

まさか父が浮気をしてきた子供とは言いたくない。父のことはどうでもいいが、梨花のことをそんなふう間違いでできた子供のようには表現したくなかった。

「なるほど。だが、妹がいたとしても、君が金に執着していることには変わりはないわけだ」

佳貴は断定口調で言った。

本当に必要なのお金ではなかった。祖父が生きていたら、親戚として頼りたかったが、それは単なるお金の問題ではないのだ。

梨花のために、そして、二年前までは母のためにも、沙耶は懸命に働いてきた。けれども、ほんの少しでも苦勞を誰かと分け合いたいと思ってしまっ。

精神的に、誰か頼れる人が、自分には必要だった。

もちろん、祖父にそれを求めるのは、あまりに虫がよすぎるとは思っていた。そう……やはり、

母が病に倒れたときに、連絡すべきだったのだ。そうすれば、こんなふうに恨まれることはなかっただろう。

しかし、母の拒絶を超えるだけの、勇気が自分にはなかった。祖父が両親を罵倒して、二度と帰ってくるなど言ったように、自分も同じようにはねつけられるかもしれないと思ったからだ。

まさか、祖父がこんなふうに関心してくれていたなんて……

母に知らせてあげたかった。母は父親に憎まれていると思ったまま、この世を去ったのだ。

そう思うと、後悔だけが押し寄せてくる。なにもかも遅かった。母が死んだ後でも、もう少し早くここに来ていればよかった。そうすれば、生きている祖父と対面できたのに。

沙耶は祖父の顔も知らないことに、今、気づいた。なにもかも遅すぎたとしても、せめて最後の義理は通そう。

顔を上げて、息を吸い込んだ。佳貴は威圧的で、沙耶にはとても怖く思えた。

「お祖父さんにお線香を上げたいんですけど」

佳貴は唇を歪めて笑った。

「それを、いつ君が言い出すのか待っていたところだよ」

沙耶の心は傷ついたが、そう言われても仕方がない。彼は祖父のことで何度も連絡したと言っているが、沙耶はそんな連絡など受け取っていない。彼にそれを証明できない以上、それこそ卑劣な女だという印象は拭えないのだろう。

広い和室に案内された。大きな仏壇の前に小さな祭壇が設けられている。白い布がかけられ、そ

こには祖父の写真と位牌、そして遺骨が置かれていた。

亡くなって、一週間。つまり、納骨もまだなのね……

自分は本当に祖父が亡くなってすぐに、このこ現れたのだ。遺産目当てのように思われても仕方がない。

沙耶は祭壇の前に置かれた座布団に座り、祖父の写真をじっと見つめた。頑固そうな顔つきをしているが、どこか母と似ていた。

沙耶は線香を上げると、手を合わせた。

「ごめんなさい、お祖父さん。一度も会いにこなくて……お母さんの病気を知らせなくて、ごめんなさい。」

いくら謝っても、許されないのはわかっている。けれども、謝ることしかできなかった。

「まるで、君が改心したように見えるよ。演技が上手いんだな」

後ろから佳貴に声をかけられて、沙耶は胸がずきんと痛んだ。

彼にとっては、このままずっと自分は金目当ての卑劣な女のままなのだろう。そう思うと、悲しかった。

彼とは血縁関係はないが、それでも戸籍上は沙耶の叔父ということになる。父にも母にも他に兄弟がいなかったから、自分にとって一番近い親族なのだ。その大事な相手に、こんなに嫌われてしまった以上、沙耶はもうここにはいたくなくなった。

「わたし……帰ります。すみませんでした……」

座布団から下りて、佳貴に向き直ると、頭を下げた。佳貴は軽蔑しきった表情を崩しはしなかった。

「帰る前に書齋で話そう。君が喜びそうな話があるんだ。お祖父さんの遺産のことで」

もう、これ以上の侮辱は受けたくない。梨花のためにお金は欲しいが、一度も会ったことのない祖父の遺産を受け取ることはできなかった。それは養子である佳貴に権利がある。

宮瀬ホールディングスなんて会社のことはよく知らないが、彼がそのCEOだということは、きっと祖父の会社の後継者でもあるということなのだろう。だとしたら、やはり遺産は彼のものだ。

「いいえ、もういいんです。わたし、お祖父さんに会いたかっただけです。……失礼します」

沙耶は立ち上がると、佳貴の返事を待たずに、玄関へと向かった。佳貴は追いかけてはこなかった。当然だろう。彼は自分を追い出したくて、たまらなかつたはずだから。

靴を履いていると、佳貴の代わりにお手伝いの女性がやってきて、見送ってくれた。沙耶が出ていけるように、門扉が開いている。まるで、おまえなんかさっさと出ていけと言われていたようでもあった。

こんなところに来るんじゃないやなかつた……

いや、違う。来たからこそ、自分にはもう誰も頼れないことがわかったのだ。今までどおり、梨花はわたしが守らなくてはならない。それだけのことだ。

沙耶は涙が出そうになるのを抑えて、足早に駅へと向かった。

今日は最悪の休日だった。

沙耶は早くアパートに帰らたかった。頼みの綱の祖父がすでに亡くなっていたことや、それに次ぐ後悔、そしてなによりも佳貴の非難がこたえていた。

帰る途中、近所のスーパーで食料品を買った。落ち込んでいる気分を手取り早く解消するには買い物が一番というが、無駄なことにお金を使う余裕はないので、食料品を買ったのだ。どうせ必要なものだ。それに、今日は少し豪華な食事にしよう。沙耶はトンカツ用の肉を買い込み、これだけ傷ついた心が癒せますようにと祈った。

沙耶が住んでいるのは公営アパートの二階だった。今日は天気がよかつたから、朝干した洗濯物はもう乾いているだろうか。そんなことを考えながら、階段を上がろうとして、そこにいる人物に気づき、ギョッとした。

「沙耶……久しぶりだな」

そこにいたのは、沙耶の父だった。だらしない服装にくたびれた顔。とりあえず、今日は素面のようにだったが、まともな生活をしているとは思えない。

父と顔を合わせたのは一体、何年ぶりだろうか。沙耶は過去のことを思い出して、顔をしかめた。赤ん坊だった梨花を抱いた若い女性が押しかけてきたのは、沙耶が十二歳のときだった。もう中学に通っていた頃だ。女性は父の子だと言って、梨花を沙耶に押しつけて、帰ってしまった。突然現れた腹違いの妹に、沙耶はどうしたらいいのかわからなかつた。

父はあっさり梨花が自分の子だと認めた。母は浮気されていたことを知り、傷ついたが、父の子だと思つと、見捨てられなかつた。それに、梨花はとても可愛い赤ん坊だったのだ。あの女性が梨

花を捨てていったことが、沙耶は不思議でならなかった。

梨花は女性の戸籍に入っていて、認知もされていなかった。母は父を説得して、梨花を我が家の養女にした。そして、いびつだけれど、四人家族として生活を始めた矢先、父は行方をくらましたのだ。

あれ以来、こんなふうには、父はたまにふらりと家にやってきた。が、家にお金を入れるわけでもなく、母にさんざん酒代を払わせた挙句に、またふらりと出ていった。その繰り返しで、最後に来たのが母の葬儀のときだった。

沙耶はあのときのことを思い出し、唇を噛んだ。

「お父さん……よくものうのと顔を出せたものね！」

葬儀のときにやってきて、父は香典を盗んでいったのだ。それだけならまだいい。梨花に本当のことを喋ってしまったのだ。母の子ではないことを。

梨花は両親の子供だと信じきっていたのに。

「お父さんはひどい人よ！ 梨花にわざわざあんなことを……」

「ひどいこと？ それなら、梨花は実の母を知らないままでよかったって言うのかい？」

呑気な口調で尋ねられて、沙耶は怯んだ。確かに梨花には実の母親がいるのだ。あの女性だって、今頃、梨花を捨てたことを後悔していても限らない。それなのに、真実を告げないのは、正しいことだろうか。

「でも……梨花はまだ八歳だったわ」

母が死んだだけでもショックだったのに、その母が本当の母ではなかったなんて知らされて、どれだけ苦しんだだろう。あるとき、沙耶は呆然とする梨花を抱き締めて、泣いた。そして、彼女に何度も何度も囁いた。

『お姉ちゃんがお母さんの代わりになるから』と……

そんな騒ぎを起こした張本人は、香典を持って逃げたのだ。いつそ警察に通報しようかと思ったくらいだ。

「もちろん……悪かったと思うっている。香典のことも。どうして、あんなことをしてしまったんだか……。あれから後悔したんだ。だから、ここ二年は、家には寄りつかなかった」

「当たり前よ。妻の香典を盗む夫がいるもんですか。恥じ入って、一生、顔を出さないのが当然なんじゃないの？」

沙耶は父に対しては辛辣だった。母と駆け落ちまでしておいて、結局、母を幸せにできなかった男だ。それどころか、死に追いやったと言つてもいい。

画家を目指していたという父は、家にいたときもあまり真面目に働いているとは言いがたかったし、沙耶が物心ついたときから母はずっと働いていたのだ。母に苦勞を押しつけているうちに、挫折した父はあるときから酒に逃げてしまった。もちろん、父が行方をくらませてから母は、もっと苦勞したはずだ。

「そう言うなよ、沙耶。梨花に会いたいんだ。あの子の顔が見たい。会ったら、すぐに帰るから。なあ、頼む！」

くたびれた父親が娘に頭を下げている。沙耶はどうにこの男を父親だとは思っていないが、それでも彼が戸籍上でも血縁上でも父親であることに変わりはない。こんな格好をしているのだから、きつとろくに金も持っていないのだろう。それどころか、住む所がなくても、おかしくない。

やはり、自分の父親を見捨てられるはずがなかった。

こんな男でも、優しかったことはある。絵筆を握り、幼い沙耶を愛情込めて描いてくれたこともある。もう、そんな絵も、本人が処分してしまつて、一枚も残っていないが。

沙耶はため息をついた。

「……わかつた。一晩くらいは、うちにいてもいいわよ」

「ありがとう！ さすが俺の娘だ」

そう言われても、ありがたくもなんともない。いつそ縁が切れたらいいのに。沙耶はそう思いながら、バッグから鍵を出してドアを開けた。

梨花は久しぶりに父親に会えて、屈託なく大喜びをしていた。

それは、もちろん彼が香典を盗んでいったことを、梨花には知らせていないからだ。葬式に来てくれたのは母の勤め先の人や近所の人、それから沙耶の勤め先の人やごく親しい友人くらいで、香典自体はものすごい大金というわけではなかった。しかし、そんなお金を盗んでいった父のことは、どうしたって許せるはずがない。

けれども、学校から帰つてきた梨花が父に飛びついて、喜びを全身で表しているのを見ると、な

んだか自分が悪者になつたような気がしてしまふ。

「ねえ、お父さん、これからずっと家にいるよね？ もう出ていったりしないよね？」

そんなわけではない。梨花だつて知っているはずだ。父は家に居着かず、いつもふらふらと出ていくのだ。

「ああ。お姉ちゃんがいいと言つてくれたら、いつまでもいるよ」

父がそんなふうに答えているのを聞いて、沙耶はキッチンで包丁を取り落とすところだつた。

まさか、そんなことを言い出すとは思わなかった。いや、どうせ出ていくに決まっている。今までだつてそうだつた。梨花に期待を持たせたくない一心で、沙耶は声をかけた。

「どうせ、お父さんはまたいなくなるに決まつてる。梨花、喜ぶのは、お父さんがここでちゃんと仕事を見つけてからにしたほうがいいと思うわ」

仕事を見つけたとしても、父はいつもすぐに辞めてしまうのだ。どうして母がこんな男と駆け落ちまでして結婚したかつたのか、沙耶にはさっぱりわからない。

いや、父にはただひとつ長所があつた。口が上手いという長所だ。きつと母は騙されたに違いない。画家を志す青年に、薔薇色の未来を見てしまったのだろう。彼にすべてを捧げ尽くしても構わないと思うほどに。

「じゃあ、沙耶は俺がここにいってもいいんだな？ 梨花、よかつたな。ずっとおまえと一緒にいられるぞ」

沙耶の言葉を自分の都合のいいように捻じ曲げている。沙耶はうんざりしたが、梨花は父の言う

ことを聞いて、すでに喜んでた。

「やったー！ お父さん、ずつといてね。約束だよ！」

いずれ梨花が悲しむことになるのは確かだが、今はそつとしておこう。沙耶はそれより勝手なことを言っつて、自分と梨花の世界をかき乱す父が憎かった。香典泥棒のことは、梨花には言わなかったが、いっそ言っつてしまえばよかったのかもしれない。こんなに腹立たしい思いをするくらいなら、

梨花はほとんど父親のことを知らない。そう思うと、不憫に思う気持ちもある。たとえ一時でも、父親と一緒にいられることが、梨花の喜びならば、香典のことは頭の隅に押しやってもいい。

もっとも、お金の管理だけはしておこう。大した貯金はないが、それを盗まれてしまったら、自分たちの生活が滅茶苦茶になる。いくら香典を盗むような男でも、そこまではしないと自分が。親としての責任を放棄している上に、自分の娘達を一文無しにしたいとは考えていないだろう。

沙耶は厳しい声で父に忠告した。

「ここにいたいなら、お酒はやめてね。それから、絶対に仕事を探して、真面目に働いて。わたしのお給料だけじゃ、三人も暮らせないんだから」

今だつてぎりぎりの生活だ。わずかな貯金ができるくらい稼ぎしかない。なにかあったときのために、貯金は崩したくないから、やはり父の面倒まではみられないのだ。

「ああ、わかつてるよ。娘の世話になりたいわけじゃないんだ。俺だつて、もう歳をとつて、落ちてきたいんだよ。淋しくなつちまつてさ……おまえ達と暮らしたいんだ」

父は目をしばたいた。今までどこでなにをやつていたのか知らないが、確かに長年の放浪生活

がたつたのか、ずいぶん老けてしまつてゐる。家族のことが急に恋しくなつてきて、仕方がないような気がしてきた。

父のことを追い出したいと思つてゐた沙耶も、情にほだされそうになる。

信用してはいけないと思つたのに、やはり自分の父親だと思つと、あまり冷たい態度も取れない。

「わかつたわ……。わたしは約束さえ守つてくれれば、もう文句は言わない」

「ありがとう！ 沙耶、おまえは素晴らしい孝行娘だよ！」

結局は父の思いどおりになつてしまつてゐる。それはわかつてゐたが、沙耶は少し様子を見てもいいだろうとも思つた。

貯金通帳はちゃんと隠した。それに、暗証番号なんて父にはわからないはずだ。念のため、印鑑はバッグに入れて、持ち歩いていれればいい。父親を疑いたくはないが、いざというときのために備えだけはしておくべきだろう。口座にあるお金を全部失つたら、すぐに生活ができなくなるのだから。沙耶は用心だけはしておこうと、固く心に決めた。

3

それから三日が過ぎた。

父は今のところ仕事を探しているようだが、まだ決まつてはいない。だが、梨花にはいい父親ぶ

りを發揮して、それだけはよかったと思う。

沙耶はいつものように朝食を作り、仕事のためにアパートを出た。今日は日曜で、梨花は家にいる。二人きりにしても大丈夫なのかと思っただが、仕方ない。梨花は父のことを全面的に信頼しているのに、自分はこれほど警戒心を抱いている。梨花のように、父を家族の一員だと思えばいいのだが、やはり今はまだ無理だった。

沙耶は自分の職場であるムラサキ堂に着くと、更衣室で制服に着替えた。そして、名札を胸につける。ロッカーの扉の内側には鏡が取り付けられている。それを見ながら、長い髪をうしろでまとめて、乱れないようにした。接客業において、身だしなみはなにより大事だからだ。

メイクは控えめにしているが、それでも素顔でいるよりずっと大人びて見える。沙耶は服装にも乱れないか、ちゃんとチェックしてから、二階の婦人服売り場に向かった。

日曜日は平日より客が増える。沙耶は、ずっとレジを担当していた。この売り場で仕事するのももう二年になる。ここで扱う婦人服についても詳しくなっていて、後輩に頼られる存在にもなっていた。

母が病と闘っているときは、病院とアパートを歩き来していて、仕事も大変に思っていたが、今はけっこう楽しんでやっている。梨花も、今では一人きりで留守番させておいても、それほど心配がない。

父のことだけは心配だが……。父が本当に頼りになるのなら、自分ももっと楽になれる。祖父に会いにいったら、あんなに嫌な思いをすることもなかったのだ。

ふと、沙耶はあのとときに会った男のことを思い出していた。

宮瀬佳貴……。あんな出会いでなかったなら、自分は彼に夢中になっていたかもしれない。そんなことを考えてしまい、沙耶は慌ててその考えを打ち消した。

わたしだったら、仕事中に、なんてことを考えているのかしら。

こんなに気が緩んでいるところを主任に見つかったら、きっと注意されるだろう。そんなことを考えているうちに、気難しい顔をした三十代の女性主任がレジのスペースの中へと入ってきて、沙耶に耳打ちした。

「応接室にお客様がいらしているわ。ここはいいから、早く行って」

「わたしにお客さん……ですか？」

誰が訪ねてくるというのだろう。しかも、仕事場なんかに。

沙耶は呆然としたが、主任に睨まれて、慌てて頭を下げた。

「すみません。よろしくお願います」

レジを主任に任せて、さっと応接室へと向かう。グズグズしていたら、後でまた叱責されるに決まっている。ポータスの査定に響くと困るので、そそくさとバックヤードの狭い通路に入り、応接室へと向かった。

今まで、応接室なんて入ったこともない。仕事中に客が来たことなんてないからだ。

ノックして、ドアを開けると、一人のスーツ姿の男性がソファに腰掛けていた。

「あなた……どうしてここに？」

沙耶は驚いた。そこにいたのは、宮瀬佳貴だったからだ。ほぼ喧嘩別れのような去り方をしたのに、彼はどうしてここへやってきたのだろう。

まだ沙耶を侮辱し足りなかったのか。あのときのことを思い出して、沙耶は思わず唇を噛み締めた。佳貴のほうはというと、相変わらず傲慢そうな顔をこちらに向けている。

「君のことは調べさせてもらった。アパートで父親と腹違いの妹と暮らしている。職場はここ、ムラサキ堂だ」

彼のようなお金持ちは、探偵でも雇って調べさせたのだろう。だが、以前にも調べさせていたのではなかったのだろうか。今さら、なにを言っているのかと、沙耶は思った。

「なんのために、わざわざわたしの職場にいらしたんですか？」

せめて、アパートのほうに訪ねてくれればいい。職場に訪ねてくるなんて、勝手すぎる。

「もちろん、理由があつて来た。だが、ここでは話せない。これから一緒に来てくれ」

彼は当然、沙耶が自分の言葉に従うものと決めてかかっているようだった。本当にどこまで偉そうなのだろうか、彼は。

「……どこに？」

「どこでもいい。プライベートな話ができる場所だ。すぐに着替えてきたまえ」

彼の居丈高な命令にかちんとくる。彼は別に沙耶の上司ではない。こんなふうに命令される覚えはなかった。

「わたしはまだ仕事がありますから」

「君はこれから早退すると、すでに上のほうには話をつけてある」

沙耶は再び呆然とした。なんて勝手な人なんだろう。そう思わずにはいられない。

確か、彼は宮瀬ホールディングスのCEOだということだった。あの屋敷の大きさからして、きっと大きな会社なのだろう。きっと金も権力も持っているに違いない。しかし、彼に雇われているわけでもない自分が、こんなふうに彼の思いどおりに動かされるのは我慢がならなかった。

沙耶は元々おとなしい性格だが、こういう理不尽なことをされると、やはり怒りたくなってくる。

「お言葉ですが、わたしのほうはあなたに話なんてありません」

「遺産についてだ。君にも権利がある。……興味あるだろう？」

決めつけられるのは悔しかったが、遺産と聞いて無視はできない。自分ではなく、梨花のためにあの屋敷にいたときには、祖父が亡くなっていたことや、金目当てだと思われたこともあって、遺産などいらなれないと思つたが、やはりそれは理性的な考えとは言えなかった。

顔も知らない祖父の遺産をもらおうなんて、凶々しいとは思つが、佳貴にはどうせそういう女だと思われているなら、梨花のために、もらえるものはおききたい。

しかし、佳貴に知り顔をされるのは、やはり屈辱的だ。沙耶は視線を逸らして言った。

「わかりました。着替えてきます」

沙耶の言葉に、佳貴はふっと笑った。いかにも馬鹿にしたような笑い方だったが、実際、祖父の遺産が欲しいのだから、馬鹿にされても仕方がないだろう。

「なるべく早くしてくれ。待たされるのは好きじゃない」

ええ、そうでしょうとも！

沙耶は心の中で悪態をついた。更衣室で手早く着替えると、再び応接室に向かう。ドアを開けようとしたところで、内側から開いた。目の前に佳貴が立っていて、なぜだか沙耶はドキッとする。彼と自分の身長差に、一瞬だけ自分が彼に守られる存在になったような気がしたからだ。

もちろん、これは単なる気のせいだ。佳貴は守ってくれたりしない。罵倒したり、侮辱するのは得意なようだったが。

「行こう。駐車場に車を待たせている」

つまり、彼は運転手つきの車を待たせているということなのだ。ごく一般の庶民ならしないことだ。そもそも、彼にはこんなスーパーの応接室は似合わない。そして、スーパーの販売員である自分とも。

バックヤードから、そのまま外に出るべきだったが、佳貴がさっさと店内のほうに出てしまったので、沙耶は後を追った。彼は広い場所に出るなり、沙耶の肩に手をかけ、まるで恋人のような仕草をした。沙耶は驚いて、肩をビクッと震わせた。しかし、佳貴は平然としている。

こんな親しげな行動をとられる意味がわからない。ここは沙耶の職場だ。同僚や先輩、後輩に見られて、変な噂を立てられるのは嫌だ。

「あの……肩に手をかけるの、やめてもらえませんか？」

沙耶は思いきって言ってみた。さすがに、振り払うのは失礼だと思っからだ。

「なぜ？」

「だって、誰かに見られたら、わたしが困りますから。あれは誰なのって、明日には質問攻めにされてしまいます。わたしの恋人みたいに思われてしまいますよ」

「私が君の恋人？ 馬鹿馬鹿しい」

そう言いながらも、佳貴は沙耶から手を離さない。

「それが嫌なら、離してください」

「君に指図されるのが気に食わないんだ」

そんな理由で、彼が意地を張るなら、さっさと手を振り払ってしまえばよかった。彼は驚くほど傲慢な上、とても頑固なのだろう。

「それに、もう君が……」

佳貴はなにか言い足そうとして、途中でやめて口を閉じた。そんなことをされると、続きが気になるのに。彼は一体、なにを言おうとしていたのだろうか。

「はつきり言ってください」

「だから、君に指図されるのは、我慢がならない。黙って、私に従ってもらいたい」

「もし嫌だと言ったら……？」

「君もしつこいな。黙って従えと言っただろう？ 金が欲しいなら、そうするんだ」

居丈高に命令をされて、沙耶はうんざりした。こんな男の言いなりになって、どうして自分の職場から連れ出されなければならないのだろう。しかも、こんな恋人のような親密そうなポーズで。

まったく、わけがわからない。

とにかく、もう一刻も早く、店の外に出てしまいたかった。足早に移動すると、同じ速さで佳貴もついてくる。まるで二人で競うように歩き、やっと外に出た。

「あなたの車は？」

「ここで待ってればいい」

佳貴が携帯を取り出し、電話をかけた。すると、程なく黒塗りの高級車がさっと二人の前に停車する。すぐにそこに乗り込むのかと思えば、わざわざ運転手が降りてきて、恭しく後部座席のドアを開けた。

まるでセレブみたいね！

沙耶はそう思ったが、実際、彼はセレブと言えるだろう。大企業のトップにいるのだから。

佳貴はさつさと乗り込み、奥のほうに座った。沙耶は恐縮しながら運転手に頭を下げ、佳貴の隣に座る。広い車内ではあるが、こうして隣同士に座ると、やはり親密な感じがしてきて、なんとも言えない気分になる。

だって、わたしと彼はそんな関係ではないんだもの。

どちらかといえば、憎み合っていると云ったほうが正しい。いや、沙耶は別に佳貴を憎んでいるわけではない。ただ、純粹に嫌いなだけだ。

運転手が自分の席に戻ると、車が動き始めた。

「これから……どこに行くの？」

沙耶が質問すると、佳貴はうんざりとしたように言った。

「だから、黙っていると云っただろう？ だいたい、どうして、いちいち反抗するんだ？ そんな性格をしているのに、よく接客業なんて勤まるな？」

余計なお世話だ。佳貴には一言言わずにはいられなくなるのが、自分でも不思議だったが、他人にはそうでもないと思う。もちろんお客様には愛想がいい。上司や先輩には口答えをしたこともない。自分で言うのもなんだが、優良社員なのだ。

「わたしは販売のプロですから、お客様にはこんな態度は取りません。あなたが無礼だから、それなりの態度を取っているだけです」

「金の亡者のくせに、よく言うな」

彼の軽蔑した口調が、胸に突き刺さる。傷つきたくないが、こんなふう^あに悪し^{ざま}様に言われて、傷つかないはずがない。

「あなたこそ、職場でいつもそんなに口が悪いんですか？」

「いや……。君にだけ特別だよ」

彼は笑いながら言ったが、そんな特別はありがたくもなんともなかった。

やがて、車はマンションのエントランスの前に停まった。彼が好みそうなタワー型のマンションだが、ここに住んでいるのだろうか。てっきり、彼の住まいはあの屋敷だと思っていたのに。

運転手がドアを開けてくれて、やっと外に出ることができた。佳貴と狭い空間に一緒にいると、辛辣な雰囲気^{しんらう}が漂ってしまって、どうしようもなかったから、ほっとする。

「さあ、行こう」

佳貴は沙耶の肩に手をかけた。なんでも指示したがるのに、自分は指図されるのが嫌だなんて、相当な我がままだ。

「ここは、あなたが住んでいるところなんですか？」

「そうであり、違うとも言える。本当の住まいは君が訪ねてきたあの家だ。ここは仕事が忙しいときにホテル代わりに泊まったり、人をもてなすときに使っている」

きつと、会社名義の部屋なのだろう。とはいえ、彼の住まいでなくてよかった。沙耶は今まで男性の一人暮らしの部屋に入ったことなど、一度もないからだ。もちろん、二人は恋人同士でもなんでもないのだから、そこまで気を回すことはないだろうが、それでもなんとなく意識してしまう。

二人きりには違いないが、仕事上のもてなしの場だと思えば、そこまで緊張するほどのことはなはずだ。

目的の部屋は、最上階のペントハウスだった。たぶんそうだろうと、沙耶が覗んだとおりのだった。そんな勘が当たったところで、どうしようもないが。

部屋に入ると、広々としたリビングに驚いた。窓は大きく開放的で、眺めがいい。白いソファは座り心地がよくて、沙耶はなんとなく気分がよくなってしまった。

だって、まるでインテリア雑誌から抜け出したような綺麗な部屋なんだから。

こんな部屋に住むのは、沙耶の小さいときからの憧れだった。お金がないために、到底、実現しそうにないが、今も夢見ている。いつか自分もお金を貯めて、オシャレなインテリアの部屋に住む

のだと。

「飲み物は？ といっても、酒くらいしかないが」

佳貴に尋ねられて、沙耶は顔をしかめた。まだ日も落ちてないのに、酒を飲むなんて、とんでもない。

「コーヒーとかないんですか？」

「ないことはないが……」

彼はきつとコーヒーを自分で淹れたことがないに違いない。誰かをもてなすときには、彼のスタッフが淹れてくれるのだろう。沙耶はきつと立ち上がって、キッチンへと向かった。探すと、すぐにコーヒーメーカーが見つかる。もちろんコーヒード豆も。

「わたしが淹れますから。……あなたは？」

「では、私の分も」

「了解」

沙耶はきつとコーヒーマーカーをセットした。そして、食器棚から勝手にコーヒーカップを二組、取り出す。

「君は意外ときばきしているんだな」

彼はどういう目で自分を見ていたのだろう。金目当てでかんだか知らないが、普通に生活していれば、コーヒークらい淹れられるに決まっている。

「長い間、母の代わりで家事をしていましたから。妹の面倒も見なくてはいけないし」

沙耶は子供の頃からずっとそんな生活をしなければならなかった。だが、一番可哀想なのは母だ。

あの父に騙されて駆け落ちしたばかりに、実家との縁が切れたばかりではなく、貧しい生活を強いられ、働きどおしだった。

いっそ離婚していれば、楽だったかもしれない。母子家庭ということで、公的援助も受けられただろう。

それなのに……

父を信じていた母が、たまに憎くなる時がある。とはいえ、沙耶もまた梨花のために、父がアパートに居候していることを許している。どうせいなくなるに決まっていると思っただが、沙耶にしてみれば、いっそいまいほうが助かる父親なのだ。

コーヒーをリビングに運んで、テーブルの上に置いた。まるで自分が彼をもてなしているよう、なんだから変な気分だった。

向かい合って座ると、佳貴はまるで自分を値踏みするかのように見つめてくる。どうせ金目当てだとか、そういうことを考えているに違いない。

彼は高級そうな仕立てのスーツを着ていて、自分はムラサキ堂で買った安い服を身につけている。なんてことはないカットソーとスカート姿で、流行のものでさえない。そんな違いを感じるだけで、自分が惨めに思えてきてしまう。

「さあ、さっさと話をしてください」

彼の視線に耐えられず、沙耶が促すと、佳貴は嫌な顔をした。

「そんなに金のことが大事か？」

度重なる彼の侮辱に、沙耶はきつと唇を引き結んだ。この男には何を言っても同じだ。しかし、祖父が死ぬまで、会いにいかなかったのは事実なのだ。そのことが、沙耶の心にはまだ重くのしかかっていた。

母が死ぬ前に、会いにいけばよかったのに……

しかし、今さら悔やんでも遅すぎる。二人が天国で和解したと思うことにしよう。そうとでも思わないことには、良心の呵責に押し潰されそうだった。

「まあいい。私だって、君とコーヒーを飲むために、ここに来たわけじゃないんだ。さっさと話を済ませてしまおう」

彼は傍らに置いていたブリーフケースから、書類を取り出した。数枚のコピー用紙をクリップで留めたものようだった。

「これは、君のお祖父さんの遺言のコピーだ」

渡されたものを受け取り、沙耶が読もうとしたところ、彼はそれを遮るように言った。

「結論から言うと、君と私は結婚しなければならぬらしい」

結婚……？

今、結婚と聞こえたような気がしたけど……？

でも、聞き間違いよね。どうしてこの人とわたしが結婚なんかしなくちゃいけないのよ。今日で会ったのは二度目なのに。

沙耶は顔を上げて、佳貴の顔を見つめて、首をかしげた。彼の眼差しは冷たく、沙耶に対して、怒っ

ているように見える。

「あの……今、なんて？」

聞き返してはまずいだろうかと思いつつ、尋ねてみた。

佳貴は目を伏せ、ため息をついた。そして、次に目を上げたときは、なにか決意を胸に秘めたような表情になっていた。

「君は私と結婚しなければ、遺産をもらえないということだ」

沙耶は呆然として、佳貴の顔を見つめた。

「ど……ど……どういうこと？」

結婚なんて、今まで一度も考えたことがない。まして、こんな男と結婚なんて、あり得ない。向こうだって、間違いなくそう思っているに違いなかった。だから、こんな怒ったような顔をしているのだ。

「読んでもらえばわかるが、養父の屋敷とあの土地以外の財産はすべて私が相続する。君がもし私と結婚すれば、あの屋敷と土地の権利がそれぞれ半分、君のものになる」

「半分だけ？ もう半分は……」

「私のものだ。もし養父の死後、三カ月の間に、君と私が結婚しないのなら、あの屋敷と土地は養父の甥のものになる。もちろん、私はあの屋敷と土地が欲しい。自分が育った思い出の場所だから」
しかし、半分だけしか、祖父は彼に残さなかった。しかも、条件つきなのだ。

「でも、そんな遺言は許されるの？ 結婚を条件にするなんて……」

今まで聞いたこともない話だ。それに、遺言は絶対ではないはずだ。確か、遺言が優先されるにしても、法律で認められている相続分というものがあつたと思う。

とにかく、わたしのことを金の亡者だつて非難する人と、結婚なんてしないわ！

沙耶は佳貴を睨みつけた。しかし、佳貴は沙耶の表情をあまり気にしてないようだった。

「結婚しなくても、君は遺留分を請求できるだろう。だが、あの屋敷と土地はあの男のものになる。それは、私としては絶対に避けたいことだ」

「じゃあ、その人からあなたが買い取ればいいんじゃない？ 財産のほとんどはあなたのものなんじゃない？」

佳貴は眉をひそめた。

「そうだ。それが問題だ。彼は養子の私が遺産のほとんどを相続することを、あまり快く思っていない。屋敷と土地を欲しがれば、法外な値段で買い戻せと言うだろうな」

それが本当なら、なんて嫌な男だろう。祖父の養子と孫娘が生きているのに、遺産をもらいたがっているなんて、ずいぶん強欲だ。

もちろん、単に佳貴のことが嫌いだということも考えられる。少なくとも、沙耶はそうだ。

けれど、彼は祖父の息子となり、ずっと祖父を支え続けていたに違いない。だとすれば、彼が遺産のほとんどをもらえるとということには納得できる。それに、沙耶は自分のために祖父の遺産が欲しいわけではない。梨花のために、少額でもいいから欲しいのだ。彼女の将来のために、少しでも貯金を増やしておきかたつた。

「あの……わたしには条件付きの屋敷と土地の半分の権利しか残されていないんですか？」
躊躇ためいつつも、尋ねてみた。すると、いかにも軽蔑けいべつしきつたような眼差しで、佳貴が見つめてくる。確かに、自分でも浅ましいと思う。だが、これもすべて梨花のためだ。自分のためではない。必死で自分の心の中で言い訳をする。本当は目の前の男に言いたいのだが、彼はきつとそんなことを信じてくれそうになかったからだ。

「そこに書いてあるとおり……現金二千万円が残されている」
「二千万！」

沙耶の声は上擦った。自分にとっては途方もない額だ。相続税を払わなくてはならないだろうが、それでも手元にたくさん残るに違いない。

「ただし、それも私と結婚すればの話だ。結婚しなければ、私のものとなる」

沙耶はがっかりした。祖父はどうしても孫娘と養子を結婚させたかったようだ。こんな迷惑な遺言を残すなんて、一体、祖父はどんな人だったのだろうか。

いや、それはずいぶん勝手な考え方だ。この遺言に一番ショックを受けたのは、やはり佳貴だろう。会ったこともない戸籍上の姪と遺産を分け合わなければならぬだけでも、彼にとっては腹が立つことだろうに、結婚までしなくてはいけないのだ。

「私は自身の財産というものをすでに持っている。だが、あの屋敷だけはどうしても欲しい。手に入れたらいいんだ」

佳貴の声は熱を帯びていた。どうやら、彼が一番欲しいものこそが、あの屋敷だったのだ。祖父

はそのことを知っていて、こんな条件をつけたのだろう。

「それじゃ、籍だけ入れる……というのは？」

沙耶は恐る恐る切り出した。それを聞いた佳貴は、顔を強張こわばらせて、首を振った。

「結婚して、三年間は屋敷に同居すること、と書いてある。つまり、養父ちちが望んでいたのは、私と君が結婚し、宮瀬家の血を継ぐ跡取りを残すことなんだ」

彼の自嘲めいた言葉に、沙耶ははつとした。祖父は養子を迎えながら、自分の血を継ぐ跡取りを産ませるためだけに、孫娘と結婚させようとしていたのだ。

それでは……彼が怒るのも無理はないわ。

祖父がどんな人間だったのか、実際に会っていないから知らないが、佳貴が可哀想な気がしてきた。いや、彼もきつと同情されたくないと思うが。わたしが祖父と会わなかったことを、あれだけ非難してきたのだから、きつと彼は養父のことを慕っていたはずだ。それなのに、孫娘と結婚しなければ、彼が一番欲しがっているものをあげないなんて、ひどいと思う。

それにしても、跡取りだなんて……

佳貴と結婚したら、どんな生活を送ることになるのだろうか、と、沙耶は一瞬だけ考えてしまった。

彼が赤ん坊を抱いているところが頭に浮かんで、そんなことを想像した自分が怖かった。

結婚なんて、とんでもないことなのに！

佳貴は沙耶の顔に視線を据えながら、ゆっくりと言った。

「だから……私は君と結婚しようと思う」

それって、プロポーズ……のわけはないわね。

尋ねているのではなく、勝手に彼が決められているだけのことだ。しかも、沙耶が断らないと思っ
ている。なんて傲慢しやうまんで偉うそうな男なのだろう。

「わたしはしたくないわ！」

すぐにはねつけて、沙耶は一瞬だけ爽快感を味わった。だが、佳貴の怒りに満ちた瞳を見て、瞬
時に後悔する。

「君が承諾しないと、屋敷も土地も、なんの愛着も持たない男のものになる。あの屋敷は、君のお
母さんの育ったところでもあるんだぞ」

そう言われて、沙耶は怯ひるんだ。母が育ったところだと思つと、大して知らない屋敷になにか特別
なものがあるような気がしてきた。

「でも、そのために、あなたと結婚するなんて……。あなただって、嫌なんじゃない？」

「もちろんだ」

即座に答えが返つてきて、沙耶はムツとする。しかし、自分も同じようなことを言ったのだ。非
難する資格はないだろう。

「だが、それが養父ちちの望みなら、結婚して子供をつくるつもりだ」

「こ、子供なんて……」

沙耶は頬を赤らめた。子供をつくるためには、ただ一緒に暮らすだけではいけないということだ。
彼は本気でそんなことを考えているのだろうか。

「無理よ……そんな……」

「別に無理ではないだろう」

素っ気なく言われて、ますます沙耶は狼狽ろうばいした。佳貴が平然としていることが信じられない。さつ
き、彼はなにを考えて、こちらを見て値踏みしていたのだろうか。そう考えると、急にどこかに身
を隠したくなってきた。

「どうせ、君は金目当てなんだろう？ 私と結婚すれば、一生、裕福に暮らせる。これ以上の望み
はないはずだ」

そんなふうに決めつけられて、沙耶はやはり気分を害した。彼は沙耶をそういう女だと思ひ込
んでいる。

「わたしは妹のためにお金が欲しいだけです！」

そう言ったものの、佳貴が信じていないのは明らかだった。馬鹿にしたような目つきで、こちら
を見たからだ。

「それなら、妹さんにも裕福な暮らしをさせてやれる。君の小遣いから援助してやればいい」

「裕福な暮らしでなくてもいいんです。ただ……今のわたしでは、充分なこととはしてあげられない
から、少し余裕が欲しいだけのことで……。でも、こんな結婚なんてできません！」

「どんな結婚ならいいと言ふんだ？」

自分を馬鹿にしている男と結婚なんてできない。しかも、子供ができるようなことを、彼とする
なんて、とんでもない。そもそも、沙耶は好きな人と恋愛結婚がしたかった。

今まで結婚したいほど好きな男性なんていなかったが、少なくとも、こんな傲慢な相手でないことは確かだ。沙耶が好きなのは、自分を好きでいてくれて、優しくしてくれる男性だ。

「三年間、同居するのは構いません。あのお屋敷は広そうだし……。それだけの関係なら、たとえ籍を入れても……」

佳貴は沙耶の言葉を鼻で笑った。

「形だけの結婚というわけか。馬鹿にするな」

「ば、馬鹿になんかしてません……」

どうして彼がそんなふうに思ったのか、沙耶にはさっぱりわからなかった。

「私には義務がある。その義務を怠ったりしない」

「ええーと……どんな義務なんですか？」

「君は一体、今までどんな話をしてきたとっているんだ？ 私の養父は君と私の子供を後継ぎに据えたがっていたと言っただろう？ 私は養父には返しきれないほどの恩がある。だから、遺言には従わねばならない。君と結婚し、子供をつくり、あの屋敷をその子に譲るんだ」

つまり、それが佳貴の義務ということなのだ。彼は頑固にも、そうするしかないと思いついていた。「ちよつと待って……。でも、でも……あんまり急だし、あなただって、別にわたしのことを好きになってもいいし」

「当然だ！ 君なんか一生好きにならない」

そんなふうに断言されて、沙耶は何故か傷ついた。そこまで言われるほど、自分という人間が

ひどいとは思えない。確かに、祖父のことでは間違いを犯した。しかも、祖父に会いもしなかったくせに、遺産はもらいたいと思っている。

でも、一生、好きにならないなんて言われて、傷つかない人間はいないだろう。もちろん、沙耶だって、彼を好きになることはなさそうだったが。

「わたし、好きな人とじゃなきゃ……」

佳貴はまた沙耶を馬鹿にしたように笑った。

「それじゃ、試してみようか」

「え、試すって……？」

佳貴はいきなり立ち上がると、テーブルを回って、沙耶の隣に腰かけた。

「あ、あの……」

肩に彼の手がかけられ、引き寄せられる。沙耶はドキツとした。これほどまでに、異性が自分に近づいたことはない。

佳貴は傲慢で嫌な男だが、同時に魅力的な容姿の持ち主であることは確かだった。その彼に、こんな真似をされて、ときめかない女がいるだろうか。

いいえ、わたしはこんな人、好きでもなんでもないんだから……

「離して……」

「試すと言っただろう？」

佳貴は沙耶の顎に手をかけ、顔を近づけてきた。

あつ……と思ったときには、唇が柔らかいものに塞がれていた。沙耶は驚いて、身動きもできなかった。手から遺書のコピーが滑り落ち、ばさつと床に落ちる音がした。

彼にキスされるなんて、信じられない。

沙耶にとつては、初めてのキスだった。

いつの日か、好きな人とするものだと思っていたのに、こんないい加減な形でファーストキスをするようになるなんて……！

沙耶は彼の腕から逃れようと、身をよじった。一瞬、唇が離れる。文句を言おうとしたそのとき、佳貴の唇が再び沙耶の唇に重なった。

口の中に何かが入ってきた。それが彼の舌だということに気づき、沙耶は狼狽ろうばいした。

心臓が破裂しそうなくらいに激しく打っている。彼の舌が自分の舌に絡みついてくる。頭の中がカツとなり、同時に身体が熱くなってきた。

わたし……一体、どうしたの？

自分でもわからなかった。こんなふうは無理やりキスされて、普通なら嫌悪感しかないはずなのに、自分がどうしてこんなにドキドキしているのかわからない。

佳貴の形のいい唇が脳裏に浮かぶ。あの唇が今、自分の唇に重なっている。しかも、それだけではない。舌と舌が触れ合うディープキスをしているのだ。

沙耶の顎を押さえていた手が首筋を撫なでた。そして、その手がまっすぐに下りてきて、胸の膨らみを包む。

自分が彼に何をされているのかに気づき、沙耶ははつとして身を引いた。

唇が離れる。

沙耶は目を大きく見開いて、まだ近くにある佳貴の顔を見つめた。

彼はにやりと笑った。

「合格だ」

「な……なに？」

彼はなにを試していたのだろうか。そして、なにが合格だと言っているのか。

佳貴はもったいぶった態度で沙耶の唇を指でなぞった。途端に、なにかよくわからない衝動が沙耶の身体を駆け抜け、ビクンと揺れた。

「君とベッドを共にするのは、別に苦行ではないということだ」

沙耶の頬はかっとな熱くなった。なんとという男だろう。彼はキスをして、本当に沙耶を試してみたのだ。

「わ、わたしは……違ちがうわ！」

「嘘をつくな」

佳貴はあっさりと沙耶の抗議をはねつけた。

「女がその気がどうかなんて、すぐにわかる。なんなら、このままベッドに行っただっていい。君の嘘を暴はいてやろうか？」

沙耶はぱつと立ち上がり、佳貴を睨にらみつけた。

今まで二十二年間生きてきて、こんな屈辱を味わったことはない。無理やりキスをしておいて、謝るところか、こんな侮辱むじやくをしてくるなんて……！

こんな男と絶対に結婚なんてしないわ！

沙耶は決心した。梨花のためなら、こんな嫌な男と暮らしてもいいと思った。しかし、とんでもない。彼とは一秒だって一緒にはいられない。

「わたし、遺産なんて知らない。だから、あなたとは結婚しない」

祖父の遺志だかなんだか知らないが、幸いにして沙耶は祖父と会ったこともない。悪かったという後悔はあっても、祖父の言いなりになって彼と結婚するなんて真っ平だった。

せいぜい、彼は欲しがっていた屋敷と土地を買い戻すために、大金をつぎ込めばいいのだ。

佳貴はふんと笑った。

「私が君なら、今、そんな結論は出さないな」

「もう……いいのよ。絶対、あなたと結婚なんてしないから！」

そう断言すると、佳貴は余裕めいた笑顔を引つ込めて、気分を害したような顔になった。

「君は遺留分を請求するつもりだな？」

遺書があっても、正当な相続者なら、いくらか相続する権利があるのだ。だが、そんなものに興味はなかった。元々、祖父とは縁がなかったのだ。いじましくも遺産をもらおうと思ったのが間違이었다。

そのために、ファーストキスを奪われた。しかも、侮辱された。

沙耶は佳貴を冷たく見据えた。もう彼とは関わりになりたくない。今さっき感じた、よくわからない甘い衝動のことも考えたくなかった。

「わたし、帰りますから」

もうここには用事はない。沙耶はつんと顎あごを上げて、部屋を出ていこうとした。しかし、佳貴が素早く追ってきて、沙耶の腕に手をかける。

「離して！」

彼に触られるのが怖かった。またキスされたら、今度はどうなるかわからない。彼に身を任せたくなくなってしまったら、おしまいだ。それこそ、ベッドに連れていかれてしまう。

佳貴はゆっくりと手を離した。

「家まで送っていこう」

「結構です。一人で帰れます」

「私が連れてきたんだ。幸い君の住所も知っている」

なにもかも探偵に調べさせたんでしょうからね！

沙耶は彼を睨にらんだが、佳貴は少しも気にせずと言った。

「家に帰って、私の申し出をゆっくり考えろといい。私と結婚すれば、遺留分を請求するより、いい暮らしができる。私の金を使えるからな。君が羽目を外さない限りは、好きにさせておいてあげよう」

まるで自分が寛大な男であるかのように話している。沙耶はかなり怒っていたが、それでも相手

を口汚く罵るなんてことはできなかった。もつとも、頭の中では最大級の悪態をついていたが。

「わたしの気は変わりません！」

しかし、佳貴は沙耶の言葉をまともに受け取るつもりはないようだった。スーツのポケットから名刺入れを出し、一枚取り出すと、その裏にペンで何かを書き足し、沙耶にそれを渡した。

「プライベートな携帯番号が書いてある。気が変わったら、いつでも電話してきて構わない」

彼は当然、沙耶の気が変わると思っている。そんなことは絶対にならないのに。

沙耶は名刺を受け取ったものの、家に帰ったら、ちぎって捨ててやろうと心に決めていた。

誰が、自分のことを金目当てだと侮辱してくるような男と結婚するものですか！

なんだか、悔しくて仕方がなかった。

4

佳貴はマンションの駐車場に自分の車を置いていた。沙耶を助手席に乗せ、アパートまで送ってくれたが、車の中ではお互いに一言も口を利かなかった。

とはいえ、降りるときには、沙耶は律義に礼を言った。

「送ってくれて、ありがとう」

「どういたしまして」

佳貴の皮肉めいた口調ですべてが台無しになる。せっかく礼儀だけは尽くそうとしているのに、彼は平気で沙耶の気持ち逆撫でするのだ。やはりこんな男とは結婚できるわけがない。

沙耶が車から降りる。すると、佳貴はちらりとこちらを見て、にこりともせず車にスタートさせた。それを見送りながら、沙耶はため息をついた。

あんな男と関わるべきではない。それは確かだった。

さんざんな半日だったが、救いはいつもより早く家に帰り着いたことだ。梨花のことを思い出して、階段を上がっていく。父は家にいるのだろうか。梨花が独りぼっちになっていないだろうか。それだけが沙耶には心配だった。

父がいつまでも家にいるなんて、信じられない。いつかまた出ていくに違いないからだ。

沙耶はドアの鍵を開けた。

部屋の中はしんとしている。テレビの音も聞こえない。

「梨花……？」

慌てて靴を脱ぎ、部屋の中へと入った。梨花が茶の間の隅で体育座りをして、顔を伏せている。

やっぱり、梨花を置いて、出ていったんだわ！

沙耶はカッとなった。わかっていたのに、どうして父を受け入れてしまったのだろう。約束を破られて、梨花は傷ついたに違いない。

「梨花、大丈夫っ？」

沙耶は顔を上げようともしない彼女に近づいた。腰を下ろし、彼女の髪に手をかける。

「お父さん、いなくなったの？」

そう尋ねると、梨花が顔を上げた。彼女の顔は涙でぐしゃぐしゃだった。沙耶はそれを見て、胸が痛んだ。

梨花をこんなに悲しませたのは、わたしにも原因がある。梨花に会いたいなんて、父の言葉を真に受けてはいけなかったのだ。あのとき、すぐに追いついていけば、こんなことにはならなかった。

「お姉ちゃん……ごめんさいっ」

梨花の目からはまた涙が零れ落ちた。沙耶はますます胸が締めつけられるような気がした。

「梨花のせいじゃないわ。お父さんは気まぐれなんだから……いつものことよ」

「違うの……違うの」

彼女は泣きじゃくっている。一体、何が違うのだろうか。

「どうしたの？ どこか痛いのか？」

梨花はキッチンのほうを指差した。そして、そこで見たものに、沙耶は凍りついた。

古い米びつの蓋が開いている。沙耶はそこにビニール袋に入れた貯金通帳をひそかに隠していたのだ。

まさか……！

沙耶は急いで米びつの中を覗いた。米の中に手を突っ込んで探ってみたが、貯金通帳は出てこない。

「お父さんが持っていたの……？」

沙耶は呆然としながら尋ねる。梨花は頷いた。

「あたし……止めようとしたんだよ。本当だよ。絶対、持っていっちゃダメだって。お姉ちゃんの大切なものだから……でも……」

梨花はまた泣き出した。沙耶は梨花の傍そばに行くと、彼女の身体をぎゅっと抱き締めた。幼い子供を、こんなつらい目に遭わせるなんて、とんでもない父親だ。いや、それは最初からわかっていただけから、受け入れてはいけなかった。

「梨花が悪いんじゃないの……。お父さんが悪いのよ……」

そして、わたしが悪い。

情にほだされてはいけなかった。妻の香典を盗む男は、娘の貯金通帳でも平気で盗むのだ。

「大丈夫よ、梨花。お父さんは暗証番号なんて知るはずがないんだもの」

印鑑は自分が持っている。ATMで下ろそうとしても暗証番号を知らなくては無理だから、貯金は無事だということだ。沙耶はそう考えて、ほっとした。

「本当に……？ お姉ちゃんの大事なお金、お父さんに盗られてない？」

梨花は涙に濡れた目で、沙耶を見つめた。子供にこんな心配をさせる親なんて、親じゃない。今度という今度は、絶対に縁を切つてやる。

沙耶はそう決心した。

「念のため、コンビニに行つて、貯金残高を確かめてくるね。ついでに、梨花の好きなアイスクリーム、買ってきてあげる」

「うん……」

梨花は顔うつせみいて、涙を手で拭いた。涙はようやく止まったようだが、顔は汚れている。沙耶はっこり笑って、彼女をぎゅっと抱き締めた。

「お姉ちゃんが帰ってくるまでに、顔を洗って綺麗しておくのよ」

沙耶は彼女の頭を撫なでて、それから足早にコンビニへと向かった。

母の誕生日を暗証番号にしているなんて、父にわかるはずがない。父は母の誕生日すら覚えていないに決まっているのだから。

しかし、不安が募つる。暗証番号もわからないのに、どうして通帳を持っていったのだろう。あんなふうに梨花を泣かせてまで。

米びつの中に通帳を隠すのは、母がそうしていたからだ。父は母がそうしていたことを、知っていたのだろうか。ひよっとしたら、父は母の通帳の暗証番号も知っていたかもしれない。

お母さんは……まさか自分の誕生日を暗証番号にしていなかったよね……？

今どき、そんな人がいるだろうか。だが、あのおっとりとした母なら、やりかねない。そして、通帳の隠し場所が母と同じなら暗証番号も同じだと、父は思い込んでいるかもしれない。

嫌な予感が胸を過ぎる。そんな予感は当たってほしくない。しかし、今日という日の運の悪さを思うと、最悪のことも考えずにはいられない。

コンビニのATMにキャッシュカードを入れて、残高照会をする。

沙耶は血の気が引いた。このまま倒れるかと思った。残高は0円。すべて引き出されていた。父は一円残らず、無情にも全額引き出していたのだ。

やられた……！

実の父に、ここまでやられてしまった。貯金のすべてを奪い取られてしまった。大して貯まってもいなかっただが、自分と梨花にとっては大切なお金だったのに。

これからどうやって生活したらいいのだろうか。給料日まであと三週間もある。三週間、財布の中のお金だけでは生きていけない。

沙耶は愕然かくぜんとしながらも、梨花との約束のアイスクリームは買った。お金はなるべく使いたくないが、梨花に心配をかけたくない。本当のことを言ったら、きっと梨花は自分が悪かったと思うだろう。そんなふうに思わせてはいけない。

ああ、でも、どうしたらいいの？

給料日までの三週間分の生活費は、どこから借りるしかない。しかし、借金をすれば、返さなくてはならない。ただでさえ、お金を切り詰めて生活していたのに、借金を返すとすると、生活が苦しくなる。ボーナスが出るまで、まだ間がある。梨花にももつと我慢をさせなくてはならなくなるのだ。

思えば、沙耶は子供の頃からずっとお金の苦労ばかりしてきた。せっかく少しは貯金ができたと思っていたのに、すべて、また一からやり直さなくてはならない。香典を盗まれたとき以上に、今回はショックだった。

今回のようなことを、きつと母は何度も経験していたに違いない。今になって、それに気がついた。父はふらふらと家に帰ってきては、すぐにいなくなっていた。母は淋しそうな顔をしながらも、

仕方ないと言っていたのだ。

父のだらしなさにも腹が立つが、そんなことにも気づかなかった自分にも腹が立つ。

あんな男を家に入れたばかりに、自分と梨花の将来を危機に晒してしまった。これから、どうしよう。生活費はどこから借りればいいのか。

アパートの建物が見えてきた。ふと、沙耶はさつき佳貴の車から降りたときに、同じ風景を見たことを思い出した。

彼と結婚すれば、遺産が手に入る。

しかも、住むところにも困らない。梨花を悲しませることは、きつとないに違いない。

沙耶の脳裏に、あの大きな屋敷が浮かんだ。あの家に住むことができたなら、梨花はどれだけ喜ぶだろう。ずっと欲しがっていた自分の部屋を持てるし、お姫様のようにベッドで寝かせることができるかもしれない。

食いたいものを食べ、着たいものを着て、欲しいものを手に入れる。ずっといろんなことを我慢してきた梨花にも、そんな楽しみが訪れてもおかしくはない。

そのチャンスが目の前にある。沙耶は自分のプライドのために、それを踏み躪ろうとしていたのだ。確かに浅ましいことかもしれない。見たこともない祖父の遺産を手に入れるために、好きでもない男と結婚して、子供を産むのだ。

しかし、それで梨花を幸せにできる。

自分の幸せなんて望んでいない。梨花を幸せにすることだけが望みだ。母は亡くなる前に、沙耶に頼んだのだ。梨花をお願い、と。

梨花はバッグを開けて、名刺を取り出した。

佳貴はきつと笑うだろう。こんなに早く気が変わるなんて、やはり金の亡者だと思うに違いない。でも……

梨花のためよ。プライドなんて、この際、どうでもいい。梨花のためなら、地獄に落ちてもいい。それがたとえ、自分自身を切り売りすることであっても。

沙耶は携帯電話を取り出し、名刺に書いてある番号を押した。

『はい』

佳貴の滑らかな声が聞こえてきて、沙耶はドキッとした。だが、ぼんやり相手の声に聞き惚れているわけにはいかない。慌てて、名乗った。

『君か……！ まさか、こんなに早くかけてくるとは思わなかった』

もちろん、わたしだって思わなかったわ。

父が自分を打ちのめすようなことをしなかったなら、こんな電話をかけることはなかっただろう。しかし、背に腹は変えられない。ぜひとも、この結婚をなるべく早い時期に成立させなくてはならない。できれば、借金なんてしたくないからだ。

沙耶は今まで借金をしたことがない。家電を買うときに、ローンを組んだことがあるくらいだ。

しかし、今までしたことがないからこそ、借金をするという行為が怖かった。父があれだけだし

ない人間なのだ。ひよっとしたら、自分もその性質をいくらか受け継いでいるかもしれない。だとしたら、借金こそがその引き金になってしまいかもしれない。

考えすぎかもしれないが、さんざんお金に苦労してきた。これ以上の苦労はもうしたくない。当然、梨花にはこんな苦労を味わせたくなかった。

『それで？ わざわざ電話をしてきたということは、気が変わったということだろうか？』

沙耶が黙っていると、向こうから話を切り出してきた。

この質問に答えれば、わたしは自分を売ることになる……

わかっているが、その答えは避けられなかった。

「ええ。気が変わりました。結婚します」

予想に反して、佳貴は嘲笑あざわらったりしなかった。代わりに、安堵のため息をついた。

『いいだろう。今週の水曜に時間が空くから、その日に籍を入れよう。……まさか、豪華な結婚式がしたいなんて言わないだろうね？』

揶揄やぶするような口調に、沙耶はムツとした。

「そんなことを考えてないわ。本物の結婚とは違うもの」

『そのとおりだ。明後日までには退職するといい。それから……』

「退職？ わたし、仕事をやめるつもりは……」

今度ははつきりと佳貴の嘲あざわらり笑う声が聞こえた。

『君は働く必要がない。宮瀬ホールディングスの実権を持つ男の妻が、スーパーの店員だって？』

誰が聞いたって、笑うだけだ』

沙耶の頬は恥はずかしさに火照ほった。確かにそうかもしれないが、今まで自分の仕事に誇りを持ってやってきた。そんなふうに貶おとしめられる筋合いはない。

「でも、すぐにはやめられません。退職するには一カ月前に連絡を……」

『それは、私が手を打っておく。君はすんなりとやめられる。そうだな。明日は退職の挨拶だけして、ロッカーを片付けて帰るんだ。明後日にはアパートに引越しの業者を派遣する。君の荷物だけなら、大したことはないだろう。その日のうちに、君も屋敷に移ってきて……』

沙耶は呆然とした。佳貴は自分に都合のいいように、沙耶のスケジュールを勝手に決めてしまっている。話し合う気持ちすらない。あまりにも横暴だった。しかも、今、結婚すると気持ちを伝えなければならぬのに。

「わたし、条件があるの」

沙耶は佳貴の言葉を遮さへって、自分の意見を通すことにした。そうしなければ、すべて彼の言いなりということになってしまう。

『条件？ まあいい。一応、聞いてやろう』

彼はとことん傲慢ごうまんな男だった。

「そちらに引越すことも、仕事を辞めることも、それから早急に籍を入れることも、受け入れます。わたしの条件はただひとつ。妹の面倒も見えてほしいんです」

『妹さんの？ しかし、お父さんが一緒に住んでいるんだろう？』